Vol. 30

発行／平成23年10月31日
編集／四国の川を考える会

水紋

すいもん

貞光川の自然の造形
「鳴滝・土釜」

徳島県の北西部つるぎ町を流れる吉野川の支川・貞光川。その上流には、剣山系から流れ出た水によってできた約十キロにわたる大渓谷があり、そこには、自然が創りだした豪快な鳴滝、奇岩連なる土釜がある。

三段からなる鳴滝は落差八十五メートルで県下随一。白い水しぶきを上げながら豪快に流れ落ちる様は、まるで巨大な竜が身をくねらせて滝壺から昇っているようだ。

剣山へ登る行者は、ここで身を清めたといわれる。

鳴滝から上流へ歩くこと約五分。そこに土釜がある。

土釜は、青石の岩層が長い年月をかけて川の流れに侵食されてできた甌穴(おうけつ)。非常に珍しく、県の天然記念物になっている。

狭い河床にできた釜状の滝壺の中では、激しく白波が渦巻いている。

一の釜、二の釜、三の釜と連なる姿は、まさしく自然の造形美である。

写真は、「四国みずべ八十八カ所」の一つ、徳島県つるぎ町の鳴滝・土釜

▲土釜

▲鳴滝

特集　「東日本大震災」復旧作業に参加して

【東北地方太平洋沖地震の概要】

平成二十三年三月十一日、十四時四十六分、牡鹿半島の東南東約百三十キロ付近（三陸沖）を震源とした地震が発生しました。

地震の規模を示すマグニチュードは国内観測史上最大の九・〇、最大震度は宮城県栗原市で震度七を記録しました。

この地震により、大規模な津波が発生。岩手県、宮城県、福島県を中心に、死者・行方不明者二万人以上という悲惨な結果をもたらしました。

また、建物の崩壊、地盤の液状化、発電施設被災による大規模停電など、被害も甚大なものとなりました。

【四国地方整備局の対応】

地震発生後、四国地方整備局内に災害対策本部を設置し、四国管内の河川・道路・港湾の被災状況の収集、津波対策を実施しました。

また、四国地方整備局ＴＥＣ－ＦＯＲＣＥ（緊急災害対策派遣隊）百三十一人（民間ＴＥＣ－ＦＯＲＣＥとして、四国の建設業者約百社・三百二人を含む）を地震発生直後から東北被災地へ派遣し、これに合わせ、災害対策車十七台も派遣しました。

その後、四国内における地震の影響に関する情報の収集・分析、大学研究機関との連携による現地調査を実施してきました。

【ＴＥＣ－ＦＯＲＣＥ第一陣に参加して】

地震発生直後の混乱の中、ライフラインの寸断、燃料不足、寒さという過酷な条件のもと、ＴＥＣ－ＦＯＲＣＥの第一陣として被災地支援に参加した四国地方整備局河川・砂防班の方々の体験談を紹介します。

◆河川班隊長
福島河川工事課長補佐

四国が担当する約四十キロ間の現地調査を、雨・雪の悪天候の中、三日間でやりとげるという目標の達成に向けて班員が団結し、達成することができました。

しかし、三日間の内に七十パーセントの確率で震度六規模の地震が発生するとの情報には少し動揺しました。

現地調査が十キロ／日の時もあり、普段、履きなれていない長靴のせいもあり、特に靴擦れ等の防止（靴下の重ね履きで対応）が必要でした。

今回、東北地方の被災状況調査を経験して、液状化による堤防の沈下やはらみ出しを直に確認することができ大変参考となりました。

近い将来、高確率で発生することが予想される南海・東南海地震等に対し、この教訓を伝え活かし、いざという際に迅速な対応がとれるよう努めていきたいと考えます。

◆河川班長
四国技術事務所
西山品質調査課長

現地作業着手までに調査方法を検討し、使用可能な資機材の選定、作業分担など決定するべき内容が多くありました。

現地到着後、速やかな調査着手のため、出発前の事前説明において、各自の装備の内容、調査資機材の使用法など十分な説明周知が必要でした。

今回の派遣では、マイクロバスでの現地送迎、調査区間は概ね徒歩での移動でした。一日十キロ程度の徒歩移動で、降雨、雪の状況下での測量、スケッチ、記録作業を必要としました。

また、派遣先での活動内容、方法（精度は低くて良い）については、派遣移動中も適宜情報提供が必要です。

◆砂防班長
四国山地砂防　福岡工務課長

河口部は津波で言葉にならないくらい悲惨な状況で、津波の恐ろしさを実感したとともに、堤防の液状化現象をじかに目にし、近い将来起こる南海・東南海地震に対しての教訓になりました。

宿泊所（作業基地）が山形県蔵王であったため、通勤に往復六時間も費やしたほか、車の燃料確保に手間取りました。効率よく作業するためには、近くに作業基地を確保する必要があります。

また、冬場の北国への出動は、四輪駆動でチェーンの携帯が必要です。

◆河川班（ロジ班）
会計課　井手係長

ロジスティックス（logistics）＝計画・確保・管理・補給といった総合的な支援活動。

燃料の給油は困難を極めました。本部から情報は届いていましたが、結局は行ってみないとわからない状況でした。入れられるところで入れられるだけ入れるという対応しかできませんでした。自前の給油体制確保が必要です。

今回は冬であったために、現地での車や身体の防寒対策が大切と感じましたが、これが夏場であれ

ば、熱射病への対応、悪臭や伝染病対策が必要になってきます。

また、飲み水は冬場の数倍は必要となることや、食事に関しては、生鮮食料は日持ちがしないため、非常食のみになると思われるので、これらへの対応を今から考えておく必要があります。

◆河川班班員

河川管理課 松山係長

地震、津波直後の被災地での「河川管理施設の危険箇所調査」が今回のミッションでした。自衛隊、警察、消防が懸命に人命救助を行っている中、自分たちにも救える命があるのではというジレンマもありました。

しかし、最も得意な分野で活動することが皆のためになると納得し、調査を行いました。

これほど大規模災害の場合、情報の錯綜は当然として対処しなければならないと感じました。事件は現場で起こっています。

災害を乗り切るには、体力と気力が必要と感じました。

◆河川班班員

地域河川課 長尾係長

今回、河川で左右岸に分かれることが可能でしたが、砂防や河川でも調査範囲が広い場合は車が一台では厳しいです。

また、段差、崩れ、せまい道等があり、小回りが可能な車が必要です。

不慣れな土地での移動となるため、最新カーナビ、地図など現地の解る資料の用意が必要です。

現地調査で先遣隊方式により、移動時間のロスを縮減することが出来たほか、現地調査中は給油作業に出かけるなど、時間の有効利用が出来ました。

今回は、雪、雨の中での現地作業のため、防水用紙が必要でした。

また、トランシーバーは左右岸の班の連携、バスとの連絡に重要でした。贅沢を言えば、無線のようにもっと電波が飛ぶものの方がよい。衛星電話は緊急時のみしか使えませんでした。

現場作業においては、リュックサックに入らない、ポール、スタッフ、距離測定器等は、全員が両手に大荷物で歩くことになり、斜面歩行など危険が生じるため、何らかの対策が必要です。

移動中の地震、津波、放射能などの情報源としてテレビがあるが、現地作業中、歩くときはラジオだけとなるため、携帯ラジオは常備品でした。

【東日本大震災の教訓】

地震直後から五月三十日まで行われた現地支援から、多くの教訓を得ることができました。

●耐震対策による機能更新や液状化対策を行っていた道路、港湾、河川堤防、役場などは壊滅的被害を免れました。

▲耐震補強済みの橋脚

▲耐震補強なしの橋脚

▲被災直後(国道45号釜石市)

●早期の道路確保が支援活動・復旧活動に大きく寄与しました。

▲2車線交通路確保
(3月12日撮影)

●信頼性の高い道路ネットワークの整備、高速道路が緊急輸送道路として効果を発揮します。

「命の道」として救急・救援、復旧に役だった三陸縦貫道は津波を避けて計画されており、被害を受けることなく緊急輸送道路として機能しました。

▲津波を想定して建設された
三陸縦貫道

●平野部では、盛土形式の高速道路が津波被害を抑制しました。

海岸から四キロ付近まで津波が押し寄せた仙台平野では、周辺より高い盛土構造(七～十

メートル）の仙台東部道路に、約二百三十人の住民が避難しました。

また、仙台東部道路の盛土は、内陸市街地への瓦礫の流入を抑制しました。

周辺より高い盛土構造の仙台東部道路 ▶

▲被害の大きかった海側

▲被害の少なかった陸側

●道の駅やインターチェンジと一体で整備された周辺施設が自衛隊の活動拠点や住民の避難場所、水、食糧、トイレを提供する重要な防災拠点としての機能を発揮しました。

自家発電設備を備える駅では、二十四時間体制で対応しました。

▲自衛隊の復旧支援活動の拠点として機能する道の駅「津山」

▲「道の駅」を自衛隊の活動拠点として活用

●巨大津波に対して、防波堤や防潮堤などが被害軽減に一定の効果を発揮します。

太田名部地区防潮堤が津波に対して決壊せず、上流にある集落への津波被害を抑えました。

▲上流にある集落への津波被害を防いだ太田名部地区防潮堤

●高台に設けられた学校や病院などの重要施設は被害を免れ、避難所としても機能しました。

高台（十六メートル）に建設された「女川町立病院」は、一階まで津波が押し寄せたものの、大きな被害は免れ、避難所として機能しました。

▲高台に建設された「女川町立病院」

●高台への避難道路や道路に設置していた非難階段などの避難設備が有効に働きました。

▲小本小学校の体育館裏から伸びる国道45号へ続く避難階段

津波は岩手県岩泉町小本地区にある高さ十二メートルの防潮堤を乗り越えて川をさかのぼり、家屋をのみ込みながら小学校まで迫ってきました。

間一髪で児童八十八人の危機を救ったのは、二年前に設置された百三十段の避難階段でした。

【今後、強化すべき事項】

東日本大震災の教訓から、今後、強化すべきと思われる事項

1 信頼性の高い道路ネットワークの確保

①四国８の字ネットワーク

②高知道の信頼性向上

③瀬戸内側から太平洋側へのアクセスの信頼性の向上

2 津波被災想定エリア内の構造物の信頼性の向上
①重要施設の配置の見直し
②河川・海岸堤防、橋梁、港湾・空港施設、建築物等構造物のあり方の見直し（液状化対策、落橋防止、超過外力対策など）
3 確実な避難を達成するためのソフト・ハード・ベストミックスの総合対策の推進
①安全な避難場所・避難路の確保
②事前情報（ハザードマップ・被害想定の表示等）、リアルタイム情報（大津波警報）等の提供、被災記録の伝承
③防災無線・サイレンなどの情報提供手段の整備
④最後の手段としての津波避難ビル・津波避難タワー
4 緊急対応、復旧・復興を見据えたオペレーション計画とそれを支える施設の整備
①くしの歯に相当する道路啓開計画の事前準備
②津波浸水排水計画等の事前準備
③防災拠点（庁舎、ヘリポート等）、災害対策用機械などの整備・充実
5 災害に強い地域づくり、まちづくり
①津波被災想定エリアから安全なエリアへの定住の誘導
②老朽密集市街地・老朽公営住宅の解消
③確実に逃げられる、被害を最小化できる地域づくり・まちづくり

⇦ **四国としての基本戦略を関係機関が共有し、四国の防災力強化を図っていきます。**

川のトピックス

第二十回朝霧湖マラソン大会は今年も盛況

平成二十三年五月三日（火）、「朝霧湖マラソン大会」（主催：朝霧湖マラソン実行委員会）が、野村ダム周辺で行われました。県内外から、昨年を五百人ほど上回る約千九百人のランナーが参加し、五キロコースとダム堤体天端も使用した十キロコース、ハーフマラソンのそれぞれのコースで健脚を競いました。

当日は、昨年の猛烈な暑さとは打って変わり、曇り空で涼しく、ランナーにとってはとても走りやすい天候でした。

▲ダム堤体天端を走るランナー
景色も楽しみながら走りました。

また、地元野村中学校より、給水等のボランティアに約百五十名が参加し、大会を一層盛り上げました。

今年は、参加賞や上位入賞者への表彰に加え、飛び賞や抽選会の景品なども用意し、大会後も大いに盛り上がりました。

参加者からは、「上り下りを繰り返す高低差百五十メートルのトリッキーなコースは癖になる」「地元の人たちの応援と可愛らしい中学生たちのボランティアに感動した」などといった声がよせられました。

今後も「のむらダムまつり」とあわせ、地域活性化を図る一つのイベントとして、盛大に行われることを期待しています。

「重信川クリーン大作戦」を開催

六月四日（土）、「重信川の自然をはぐくむ会」の主催で、「重信川クリーン大作戦」（清掃活動）が行われました。

「重信川クリーン大作戦」は、平成十七年一月に重信川エコリーダー（愛媛大学生）の呼びかけにより開催され、年に一～二回、継続的に実施されており、今回が節目の十回目となりました。

清掃は、重信川河口、重信橋周辺、拝志大橋周辺の三箇所で行われ、約三百七十名の参加がありました。

▲一生懸命にゴミを拾う参加者
ご参加ありがとうございました。

集められたゴミは、「可燃ゴミ」「不燃ゴミ」「粗大ゴミ」に分けられ、約四百五十袋分ありました。その中には、古タイヤ・自転車・電線管等の不法投棄もありました。

また、重信川エコリーダーによるプロジェクトWET（水に関す

る教育）が実施され、高校生と大学生がグループになり、様々な水の利用（人間による消費、かんがい、エネルギー開発、生態学的価値）についてゲーム感覚で学習しました。

そして、外来種であるスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）や、オオキンケイギクの除去を試験的に行いました。

参加者から、「きれいになった重信川にすがすがしい気分になりましたが、集められた多くのゴミを見て、重信川の美しい河川環境を守り育てていくために、一人一人がゴミを捨てないようにする意識の向上や、工夫が必要ですね。」とのご意見を頂きました。

「土器川ホタルまつり」、「ホタル鑑賞会」開催

今年も六月五日（日）に、土器川生物公園で「ホタルまつり」を開催しました。

本イベントは、土器川ホタル同好会が主催し、「きれいな川の象徴であるホタルを復活させよう」という同好会主旨のもと、平成九年より、ほたる鑑賞と土器川河川愛護並びに美化啓発を目的に開かれているもので、今年で十五回目となります。

「ホタルまつり」では土器川生物研究会の協力を得て、ホタルの鑑賞や生態説明と共に、土器川に生息する水生生物の展示・紹介を行う「ホタルの一生・魚類探検コーナー」や、網を張ったテントの中に放ったホタルが何匹いるかを当てるクイズ、水風船のヨーヨー吊り、楽しみながら水の循環について学ぶ体験型ゲーム、サイコロゲーム、香川県内の「水辺の八十八カ所」の紹介や、土器川の現状についてのパネル展示など、様々な催し物を行いました。

▲「ホタルの一生・魚類探検コーナー」
親子でホタルについて勉強しました。

また、今年は東日本大震災の緊急災害支援隊として、東北へ派遣された排水ポンプ車・照明車の展示や、支援状況のパネル展示も行いました。

今年は、台風の影響で日程が変更になったにもかかわらず、家族連れを中心に約八百名もの参加者で賑わいました。

また、六月三日（金）・四日（土）、土器川出張所で開催した「ホタル鑑賞会」には、地域住民、約二百五十名の来場がありました。

中筋川ダムバードウォッチング＆自然観察会開催

中筋川ダムでは、六月二十八日（火）に咸陽（かんよう）小学校四年生（三十九名）を対象に、バードウォッチング＆自然観察会を実施しました。

講師として、国土交通省河川渓流・環境アドバイザーの澤田佳長先生をお招きし、中筋川ダム周辺に生息する鳥や植物、虫などの紹介・解説をしていただきました。

▲ほら、あそこに鳥がいるよ。
鳴き声もするね。

当日は晴天に恵まれましたが梅雨の湿気も合わさり茹だるような暑さの中、中筋川上流の約七百メートルのコースを歩きました。

児童達は澤田先生の説明を聞きながら、各々、双眼鏡で鳥を探したり、耳をすまして鳴き声を聞いたりしていました。ヒヨドリやオオルリ、猛禽類などは見ることができましたが、鳴き声はするものの、残念ながらその姿を見ることができない鳥もいました。

バードウォッチングの後は管理所に移動し、一人一箱、鳥の巣箱作りに挑戦しました。金槌での釘打ちに苦戦しながらも、最後は上手に完成させていました。

お弁当を食べ、午後からはダムの見学を行いました。一日掛けてのイベントでしたが、みんな最後まで元気いっぱいでした。

後日、「楽しかった」「勉強になった」「将来鳥の研究をしたい」「釘打ちが難しかった」等の感想をいただきました。

吉野川・那賀川一斉清掃　八千四百人が参加

七月三日（日）、河川愛護月間の一環として、吉野川水系（吉野川・今切川・旧吉野川）、那賀川水系（那賀川・桑野川）の河川一斉清掃が行われました。

当日はあいにくの曇り空でしたが、百六十四団体、約八千四百人

のアドプト団体や一般の方々が参加し、早いところでは朝六時から清掃に取り掛かりました。

今回の河川一斉清掃で収集されたゴミの量は、吉野川、那賀川で四トントラック三十一台分となりました。

▲さぁ！吉野川をきれいにしましょう。
ご協力ありがとうございました。

吉野川では、今後も、このような活動を通して、身近な吉野川の自然環境に関心を深めていただき、皆様と協働して美しい吉野川にして行きます。

那賀川でも、一斉清掃などの行事を通じ、地域の皆さん一人一人が「ゴミを捨てない」「河川を汚さない」「ふるさとの川を大切にする」などの、モラルの向上を図っていきます。

『平成二十三年度「美しい山河」図画展』表彰式と展示会を開催

国土交通省では、毎年七月二十一日(木)から三十一日(日)までを「森と湖に親しむ旬間」に定めています。

そのイベントの一環として、吉野川沿いの小学校の児童を対象に、「よりよい吉野川・銅山川」をテーマとした図画を募集し、七月二十二日(金)、高知県土佐町にある早明浦ダムふれあいホールにおいて入賞作品の表彰式を行いました。

▲優秀作品のうちの一つ
きれいな川で楽しそうですね。

今年は、対象の七校より百三十七点の素晴らしい作品が寄せられ、その中から、優秀十作、入選二十作、佳作二十三作の計五十三作品が表彰されました。

表彰式では、吉野川ダム統合管理事務所の大澤事務所長の挨拶の後、表彰状の授与が行われ、名前を読み上げられた児童は、連日の猛暑にも負けない元気な声で挨拶をし、若干緊張した面持ちで表彰状を受け取っていました。

▲受賞者みんなで記念撮影
入選おめでとうございます。

記念撮影後、希望された児童・保護者の方に、普段は入ることの出来ない早明浦ダムの堤体内を見学していただきました。

ダムの堤体内に入った児童達は、天然のクーラーのような涼しさや、発電放流管を流れる水の音の迫力に驚きの声をあげました。

また、保護者の方々も、ダムの説明に真剣な面持ちで耳を傾けていました。

なお、入賞作品は、早明浦ダムふれあいホールと徳島県三好市役所にて七月末日まで展示され、多くの方々に見ていただきました。

このように、吉野川・銅山川をテーマに図画を描いたり、吉野川の水利用には欠くことの出来ない早明浦ダムを見学したりすることにより、今まで以上に森や湖に関心を持ってもらうと共に、ダムの役割や必要性、水の大切さについても、知ってもらえたのではないかと思います。

第二十九回ファミリーハゼ釣り大会開催

平成二十三年十月九日（日）に徳島県吉野川の下流域において、徳島市水と緑の推進協議会、徳島県釣連盟、四国の川を考える会の共催で、第二十九回ファミリーハゼ釣り大会が開催されました。この大会は、毎年行われています。

大会参加者は、昨年より四十名ほど多い、約四百九十名でした。

当日は、絶好の釣り日和となり、開会を待ちかねた参加家族らは、吉野川に架かる名田橋から河口までの間に散って行きました。

また、釣りの合間に河川敷の清掃にも参加していただき、エコな釣り大会となりました。

▲いっぱい釣れたよ。
セイゴやアジも釣れたよ。

平成二十三年度 総会報告

［四国の川を考える会事務局］

平成二十三度の総会を六月二十九日、高松市において、会員百六十八名のうち五十六名が出席、九十一名の委任状をもって開催しました。

四国の川を考える会
平成二十三年度総会次第

一、開会
一、会長挨拶
一、議事
　1 平成二十二年度事業報告
　2 平成二十二年度決算報告・監査報告
　3 平成二十三年度事業計画(案・予算(案)
　4 役員の改選
　5 その他
一、閉会
一、講演
　「東日本大震災の教訓と四国における巨大災害への備え」
　四国地方整備局長　足立 敏之 氏
　「那賀川アフターフォーラムの紹介」
　那賀川アフターフォーラム事務局長　森岡 和美 氏

1 平成二十二年度事業報告

(1) 会議

①運営幹事会
開催日／平成二十二年四月二十六日(月)
場　所／高松市 四国建設弘済会
議　題／役員会・総会開催について
　その他

運営幹事会
開催日／平成二十三年三月十五日(火)～二十五日(金)
場　所／持ち回り会議
議　題／平成二十三年度助成事業について
　その他

②役員会
開催日／平成二十二年六月十七日(木)
場　所／高松市 四国建設弘済会
議　題／平成二十二年度総会について
　その他

③総会
開催日／平成二十二年七月十四日(水)
場　所／高松市 マリンパレスさぬき
議　題／平成二十一年度事業報告
　平成二十一年度決算報告及び監査報告
　平成二十二年度事業計画(案)及び予算(案)
　役員の改選

(2) 広報誌・機関誌の発行

①広報誌『あめんぼ』WEB版
発行／平成二十二年八月

②機関誌『水紋』Vol29 WEB版
発行／平成二十二年十月十二日

(3) 広報事業と助成事業

区分	イベント名	河川名	場　所	主催者	実施状況
広報事業	第28回 ファミリーハゼ釣り大会	吉野川	名田橋～ 吉野川河口一帯	徳島県釣連盟 四国の川を考える会	平成22年10月10日(日) 456名参加
助成事業	那賀川源流碑開き	那賀川	那賀川源流碑及び 源流モニュメント周辺	那賀川アフターフォーラム	平成22年4月18日(日) 約190名参加
	土器川生物公園魚類調査 及び清掃	土器川	土器川生物公園	土器川生物研究会	平成22年11月14日(日) 平成23年3月26日(日) 32名参加／回
	重信川クリーン大作戦	重信川	重信川流域	重信川の自然をはぐくむ会 重信川エコリーダー	平成22年6月6日(土) 430名参加 平成22年10月16日(土) 400名参加
	宮本武之輔を顕彰する会への 活動	—	愛媛県松山市内	宮本武之輔を顕彰する会	平成22年11月3日(水) 約300名参加

2 平成二十二年度監査報告

監査報告

平成22年度監査報告

「四国の川を考える会」会則第11条4項の規定により、
監査を執行したので報告する。

記

監査執行日　平成23年4月27日
監 査 内 容　平成22年度本会経理状況
意見　本会会計に係わる収入及び支出の状況並びに
各帳簿書類は正確であり、金銭残高については、
貯金通帳と合致していることを認める。

監事　香川県河川協会 下村 健次
電源開発㈱西日本支店　鎌田　光

3 平成二十三年度事業計画(案)

決算期間
自 平成二十二年四月一日
至 平成二十三年三月三十一日

(1) 事業計画(案)

①機関紙『水紋』をホームページにて公開
②ホームページを活用し、広報誌『あめんぼ』の情報発信を行う。
③広報事業として「吉野川ファミリーハゼ釣り大会」を行う。
④助成事業として数件の助成を行う。
⑤シンポジウム等への参加
会の目的にあったものに参加する。

(1)-③・④広報事業と助成事業(案)

区分	イベント名	河川名・場所	主催	開催日
広報事業	第29回 ファミリーハゼ釣り大会	吉野川 名田橋～吉野川河口一帯	徳島県釣連盟 四国の川を考える会	平成23年10月10日(月)
助成事業	那賀川源流碑開き	那賀川 那賀川源流碑及び 源流モニュメント周辺	那賀川アフターフォーラム	平成23年4月17日(日)
	土器川生物公園生物調査 及び清掃	土器川 土器川生物公園周辺	土器川生物研究会	平成23年9月～11月 平成24年2月～3月
	重信川クリーン大作戦	重信川 重信川流域	重信川の自然をはぐくむ会 重信川エコリーダー	平成22年6月 平成22年10月
	四万十川水辺八十八ヵ所巡り	四万十川流域	四万十川自然再生協議会	平成23年6～11月の 5日間
	宮本武之輔を顕彰する会への 活動	愛媛県松山市内	宮本武之輔を顕彰する会	定例会5回 講演会1回

4 役員の改選

●役員

役職	役員名
会長	鈴木 幸一　国立新居浜工業高等専門学校 学校長
副会長	三谷 健　いでぁ㈱四国支店高松営業所
顧問	三井 宏　徳島大学名誉教授
理事	井下 俊作　四国大学短期大学部教授
	菊池 弘美　NPO法人それいけ夢工房 代表
	公文 洽夫
	福田 昌史　㈳四国建設弘済会 理事長
	福原 吉宗　四国治水期成同盟連合会 幹事長
	加藤 均　四国電力㈱電力輸送本部水力部 副部長兼総括グループリーダー
	小野 重充　㈶河川情報センター 高松センター所長
監事	下村 健次　香川県河川協会事務局
	鎌田 光　電源開発㈱西日本支店 支店長代理

●運営幹事

運営幹事名	
加藤　均	四国電力㈱電力輸送本部水力部 副部長兼総括グループリーダー
工藤　建夫	㈳四国建設弘済会 専務理事
鎌田　光	電源開発㈱西日本支店 支店長代理
阿部　孝雄	香川県土木部 河川砂防課長
公文　治夫	
岡崎　健二	四国地方整備局 河川部河川情報管理官

●参与

参与名	
秋月　均詞	徳島県県土整備部 河川整備課長
阿部　孝雄	香川県土木部 河川砂防課長
頼木　清隆	愛媛県土木部 河川課長
吉本　祐二	高知県土木部 河川課長
岡崎　健二	四国地方整備局 河川部河川情報管理官

【新役員から一言】

◆副会長

いであ株式会社
四国支店高松営業所
三谷　健

このたび副会長を務めさせて頂くことになりました。よろしくお願いします。

私の川の原点は、生家の前を流れる幅三メートルほどの小さな川に有ります。川には、渕があり、ナマズやフナ、ドジョウ、ザリガニ、カエル、蛇など沢山の生物が生息し、両岸には河畔林がある自然豊かな川でした。

しかし、現在は三面張の水路になっています。このため川の中で遊ぶところや、魚の生息場所も無くなってしまい、非常に残念に思っています。

近年、河原に植生が繁茂し、河床の移動を妨げたり、洪水の流下の阻害となっています。

里山・里海といった言葉がありますが、これらは、人の手によって守られる物であり、只単に自然にしておいて保全される物で有りません。河原も同様に人の手が必要なのではと、最近思っています。

「四国の川を考える会」を通じて何か出来ないか、皆様のお力をお借りし、微力ながら取り組んでまいりたいと考えておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

◆運営幹事・参与

香川県土木部 河川砂防課長
阿部　孝雄

今年の四月から河川砂防課長に着任し、「四国の川を考える会」の運営幹事及び参与を務めさせていただくことになりました。

本県は降雨の少ない瀬戸内海式気候に属し、大きな河川もなく、全国的に災害の少ない県と言われています。しかし、昭和五十一年の台風十七号や六十二年の台風十九号、平成十六年には台風二十三号による記録的豪雨により甚大な被害を受けました。

また、近年は気候変動により局地的な集中豪雨が頻発する反面、全国的な少雨傾向から渇水にも悩まされています。

さらに、今年三月十一日に発生した東日本大震災を踏まえ、河川護岸等の耐震性の再検証など防災対策の取り組みを強化する必要もあります。

財政状況の厳しい中ではありますが、ふるさと香川を災害から守り、みんなが元気で安心して暮らせる地域づくりのため、事業の効率化・重点化を図るとともに、ハード・ソフト両面で工夫しながら、よりよい川づくりに努めてまいりたいと考えております。

◆運営幹事・参与

四国地方整備局河川部
河川情報管理官
岡崎　健二

この度、運営幹事・参与を担当させていただくことになりました岡崎です。四月一日付けで四国地整河川部の河川情報管理官を拝命しました。

東日本大震災や最近の台風十二号、十五号などによる水害への対応を通じて、改めて堤防などのハード施設と避難のためのハード・ソフト対策などの一体的整備の重要性を認識させられました。

このためには国、県、自治体相互、さらに住民との情報共有、連携が重要になってきます。今後四国の川を考える会の活動を通じて情報発信に努め、さらに安全安心な四国づくりに寄与して参りたいと思っています。よろしくお願いします。

◆参与

徳島県県土整備部
河川整備課長
秋月　均詞

本年五月から河川整備課長を務めさせていただいております秋月です。

このたび、「四国の川を考える会」の参与を務めさせていただくことになりました。

どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

さて、本県は四国三郎「吉野川」をはじめ、「那賀川」が東西に流れ、その支川の多くは河川勾配が緩く、洪水時に本川水位の影響を受け、常時冠水状態となる「内水河川」が数多く存在するという特徴を有しております。

本県では、これまで「災いの年」と言われた平成十六年をはじめ、数多くの洪水被害に見舞われていることから、集中的に整備を進める「重点整備河川」を設定し、着実な治水事業の推進に努めているところであります。

また、三月十一日に発生した「東日本大震災」では、河川を遡上した津波が河川堤防を越えて市街地を飲み込むなど、東南海・南海地震への備えが喫緊の課題となっている本県にとって、まさに他人事ではないと痛感するとともに、あらためて気を引き締める次第であります。

さらに、本県は「アドプト・プログラム」先進県と言われておりますが、市民・事業者・行政の協働により、「公共」を実現しようとする「新しい公共」についても、今後、積極的に取り組んでいくこととしております。

今後、「四国の川を考える会」の一員として、県民が安全・安心を実感できるよう、少しでも貢献できればと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2 ウェイ通信

『誰もが住みよい、住み続けたい町づくりを目指して』

まんのう町長　栗田　孝義　氏

香川県の南西部に位置する本町は、平成十八年に近隣の琴南町、仲南町、満濃町の三町が合併し、新まんのう町として出発しました。

人口は約二万人、面積は百九十四・三三平方キロメートル、町の南西部には町の名前の由来にもなっている日本一の灌漑用ため池である満濃池をはじめとして、町内に大小九百ものため池が点在しています。

町の南には標高千メートルを超える竜王山、大川山を主峰とする阿讃山脈が連なっており、その麓を県下で唯一の一級河川土器川が町の中央部を流れており、ため池と同様に田畑を潤しています。

気候は瀬戸内式気候であり、年間を通じて温暖少雨で日照時間が長く、降水量は年間千～千四百ミリ前後で降雨は梅雨期と台風時に集中し、その他の時期は少ないため干害が起こることもあります。その対策として古くからため池が作られています。

琴南地区においても、今まで数々の台風災害に見舞われていましたが、平成十六年災害では、満濃地区と同様に、道路、河川に大きな被害を受け、幸いにも住宅には被害は少なく、増水による河川の改修の要望が多く出されています。

また、唯一の一級河川である土器川の琴南地区においては、香川県により親水公園として整備された土器どき広場（運動公園）があり、オートキャンプ、スポーツ、各種イベント等に県内外から沢山の利用者があり、水と親しめる場所として幅広い層に活用され喜ばれています。

また、上流には、その昔、平賀源内が紹介したと言われる良質の泉源があり、美霞洞温泉の湯として利用されており、美霞洞温泉の近くには自然環境に恵まれた渓谷もあり、水と親しむ憩いの場所として、ふるさと砂防事業により河川整備がなされ多くの人々に利用されています。

これらの施設には、急な増水による利用者の安全確保を図るため、県により警報装置が設置され、より安全が図られています。

また、平成十六年災害では山腹が崩壊し、田畑を荒らし人家の近くまで土砂が押し寄せたり、増水により家屋に浸水するなど多大な被害が発生し、河川改修については多くの住民の方々から要望を受けており、関係者の協力を頂きながら河川改修に取り組んで行きたいと考えております。

災害は何時発生するかわかりません。国、県と協議しながら、町の貴重な財産である緑あふれる自然、歴史、文化を大切にしながら誰もが「いつまでもここで暮らしたいと」思える災害に強い、安全、安心のまちづくりを目指して参りたいと考えております。

川の雑学

今、世界一長い川は？

さて、問題です。
「日本で一番長い川は？」
「信濃川」。**ピンポーン♪**
関東地方に住んでいる人たちは、「利根川」と答える方が多いようです。
「では、四国で一番長い川は？」
「吉野川」。**ブー♪**
関東地方の人たちを笑えませんね。
答えは「四万十川」。吉野川より二キロメートルほど長い百九十六キロメートルです。
「それでは、世界で一番長い川は？」
「ミシシッピ川」。答えは、**ブー♪**
四十歳以上の方に多いようです。
正解は「ナイル川」。（国立天文台「理科年表(平成二十三年度版)」より）
今から三十年ほど前、小学校では、ミシシッピ川が世界最長と教えていました。
「それがどうして？」
その後、ナイル川やアマゾン川、長江の上流に新しい水源が見つかり、世界一の記録も書き換えられ、何と、ミシシッピ川は世界第四位に転落したのです。
今後も未知の源流が発見されたり、流路計測の進歩により、川の長さは変わる可能性があります。ナイル川の世界一の座を奪われる日が来るかもしれません。

編集室から

旧暦の八月十五日の月は「中秋の名月」と呼ばれ、一年で最も美しい月と言われています。
昔から、十五夜にはお月見を楽しむ習慣がありました。
三方に米の粉で作った月見団子をのせ、里芋、枝豆などの農作物を供え、秋の七草を飾ります。
七草がゆとして食べる春の七草とは異なり、秋の七草（女郎花（おみなえし）、尾花（ススキ）、桔梗、撫子、藤袴（ふじばかま）、葛、萩）は観賞用として親しまれてきました。

◇一般会員の募集について

当会では、会員の推薦により、随時会員を募集しています。勧誘・推薦をお願いします。
入会の申し込み用紙は事務局にありますので、電話等でご請求ください。
平成二十三年六月末現在の会員は、八十二名です。

◇お問い合わせ先

四国の川を考える会事務局
〒七六〇－〇〇六六
高松市福岡町三丁目十一番二十二号
ＴＥＬ　０９０－８６９７－６１６６
ＦＡＸ　０８７－８４５－０１８３

四国の川を考える会の広報誌「あめんぼ（安田川）」を掲載

当会のホームページ上に、広報誌『あめんぼ』ＷＥＢ版四号を掲載しています。
今回のピックアップ河川は、高知県の二級河川・安田川です。
是非、ご覧ください。

http://www.shikoku-river.net/amenbo/index.html

川の情報誌『あめんぼ』は、「四国の川を考える会」が四国の主な河川の紹介や川にまつわる話題やイベント、それに携わる人々にスポットを当て、より多くの人に四国の川をもっと知っていただくよう昭和五十九年から発行しています。